

槐

かい

岡井省二創刊

令和2年7月号

令和二年七月一日発行 第三十巻第七号 通巻第三四九号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



命の星

高橋将夫

地球てふ命の星や新樹光
まだ未知のウイルスひそむ余花の星
蛇ばかり眺めてゐると蛇になる
ニューロンのネットワークや蔦茂る

A I に心生まるる五月闇
現実主義更衣して理想主義

カジュアルな感じで来たる五十雀
泉にはニンプ清水に白拍子
菖蒲湯や万事からだと相談す
病葉や水に写りてうつくしき
藻の花の川の流れに虚飾なし

槐安集

加藤みき

緩る緩ると遅き櫻になつてゐし
目ざむればそこは八十八夜なり
松蟬に風と波音和してをり
春の闇光る眼と水の音
如何しても夏大根を煮て食す

中島陽華

生れ変はり死に変はりして梅仰ぐ
刀自の声したしたとあり月日貝
春蚕葉音すなはち般若なり
新宅の細木上るや春の蛇
兼好の庵が見えて花は葉に

近藤喜子

風光る水の面にある詩情
若草や光も空も印象派
時の形見きざまれてゐる汐干かな
ひつそりと見頃を迎へたる桜
ぼろんぼろんと春愁のピアノかな

瀬川公馨

本日は愛づるものなし種大根
九天へいま翔たむとすユキヤナギ
蝶蝶の行方追ふなど烏澁の沙汰
彼岸会や佛花に色のなかりせば
濃淡の雅ありけり床みどり

竹内悦子

その雲がゆけばわたしと櫻かな
天空に光と影や万愚節
お結びや筍と揚げふんだんに
卯月波消毒液の匂ひかな
腸と肝臓にこゑ四月馬鹿

雨村敏子

しののめの白木蓮の音聞こゆ
雛粟の万花にありし宇宙かな
カリヨンの音の波動や夏兆す
春晝のゆらり釜揚うどんかな
椿一樹落花の赤の埋め尽す

柳川晋

野馬にノストラダムスが乗つてきた
哲学と科学の間を桜まじ
春の海緩慢な死と側(そばだ)つ死
春うららコキユの小鼻がヒクヒクと
露の臺いまは死んでる暇がない

熊川暁子

菜の花の沖を密かに潜水艦
一と笑ひしてから山の緑濃し
春満月コンパス置かれある机上
等身大の蝶を捜しに隣村
ウイルスがあまた人呑む蜃気楼



江島照美

春の星命日よりも誕生日
逃げ水や道を求むる修羅の人
夜半の春動き出したる精気あり
乗せ上手楽しむ人の万愚節
目の語る真実ありし目借時

岩下芳子

議事堂の櫻満開予算成る
強張りて西の覗きの青嵐
雨粒のすべり下りくる柿若葉
連山の中腹白き山法師
青紅葉五指いつぱいに広げたる

寺田すず江

春雷や甚兵衛鮫の群れ撥ねる
一木いちぼくの聖者とも見ゆ白木蓮
歌垣に呼びさまされし藤の花
沖晴れやいま春筍を茹でてゐる
別れ霜体内時計の螺子を巻く

有松洋子

春の鳶比叡の上を幾廻り
羽衣のやうに柳絮の舞ひにけり
村芝居はねし社や揚雲雀
大岩を廻るや怒濤遍路杖
路地奥の暗き深まり春終る

田中信行

春愁や旧き映画を観て過ごす
思ひ立つギリシャ旅行や初蝶来
桜餅買ふもソーシャルディスタンス
桜咲く在宅勤務始めけり
チャーチルを気取る葉巻や春灯

近藤紀子

だまされずだまさず今年の四月馬鹿
竹の子の肌ヒの光る真昼かな
竹の子や昨年こぞの齒ごたへありにける
糸遊とふ銘の茶杓を拭いてをる
よその子と桜しべ払ふ木椅子

岩月優美子

春耕の人影ときに空を吸ふ
惜しみなく微笑みてをり花の山
夢の世から此の世へ枝垂桜かな
世の憂ひ飛ばしてほしい花吹雪
宙に舞ふスケートボード遅日かな

竹中一花

筍の白き匂ひや子の三人
春色を積みしト口箱海匂ふ
山藤の真昼の影に入りにける
山吹や酒の神よりもらふ吉
ちはやぶる神代の恋や花吹雪

前田美穂子

春風や蠢めき干され子供服
囀の糺の森にをりにけり
花筏二つに別れ鯉の口
夫婦岩を呑み込まんとす卯月波
釣人の足元奪ふ卯波かな

吉田順子

朝風に沈丁の香を拾ひけり
白蝶や野辺の草より湧き出し
春満月笙一管の音色かな
夕映えにひろぐる水輪残り鴨
三椏や首垂れてみて花盛り

中田禎子

櫻東風ペパーミントのガム口に
日差し受くアンティーク時計亀鳴ける
山姥の昼夜逆転余花青し
墓出でて昼行燈となりにける
夏兆す佛足跡の反射光

槐市集

阿部さちよ

疫病と花の満ちけり羅生門
人の世に白きもの満つ春景色
疫病の老いの墓前へ桜貝
ガレージに車座の子や春驟雨
背ナ叩く春の光の重さかな

井上静子

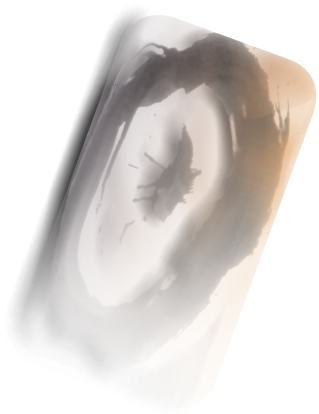
春うらら数独二問制覇せし
嘶家の相槌よろし春羽織
満開の右脳に残る櫻かな
土起こす八十八夜の土の色
さみどりの星かがやきて春シヨール

出利葉孝

窓も戸も門おろし蹴く春
接吻をするその瞬間の朧月
畦道は花道なりし踊子草
陽炎やギヤマン波動丘の上
タクト振る悪魔が闊歩春の闇

今井充子

夏近し五輪は遠くなりけり
親おもふ彼岸詣でに気付かされ
バス停や肩の花びら散らし行く
柳の芽ぬらりくらりと過ごしける
傘立の信楽焼に初桜



岩田洋子

蝶生る登校の子ら手を振りて
木の芽雨うぶ毛のごとく人恋ふる
外来の草が邪魔する花明り
樟の木の気もらつてをりにけり
待ち人の今日も通らず東菊

植木戴子

川原の瓢箪形のしやぼん玉
ふかぶかと土掘り起こす春田かな
草餅を提げて行きけり母のくに
鳥雲やひんがしに家増えてをる
チューリップ苔のごとく眠りけり

大塚たきよ

先づ佛に粽の笹の瑞瑞し
一重八重盤に浮かせて花見かな
風薫る休校の庭鶏の声
花冷えやかかる電話の皆長し
ガラス盤落花浮かせてをりにけり

岡田桃子

ひとひらもこぼさぬ風の朝桜
身を傾げつつ足踏みの春の雪
城跡の掌にひんやりと花の屑
後先にギフ蝶森に陽のあふれ
早蕨ののの字大事に天ぷら鍋に

荻布 貢

深酒の五臓六腑や蜷汁
出る朝日暮るる夕日や猫の恋
犬(ワン)ちゃんの下ハイポーズ
遠足のお菓子上限五百円
炎昼の大阪ヒートアイランド

河添久子

花万朶零るるばかり吉野山
主菓子や春告鳥の銘とあり
まんさくやこの橋の先友がゐる
華やかに咲き華かに散る桜
わが庭に鶯来よし二三日

槐集

高橋将夫選

うららかや鳥鳴き交はし魚はねる 大阪 藤田美耶子

花見ては重ぬる 齢息深く

まがごとに青ざめ白む桜かな

花筏に乗りてさ迷ふ虚空界

せせらぎの光とびつく雪柳

草の上の魚籠濡れてをり涅槃西風 枚方 橋本 順子

石鱖玉ふるへて瑠璃の現るる

花冷えのころソファーに沈めをり

凭れたる柱あやふし桜桃忌

夜の新樹雨の新樹の色となる

こころ今遠出してをり山桜 枚方 阪倉 孝子

藤棚や吉祥天に呼ばれける

胸の窓いつも咲かせるスイートピー

顔中で歌ふ園児やチューリップ

引潮へ潭身の春光りける

鶯の初音を今日の宝とす 岡崎 柴田 靖子

いつの間にか野原となりぬ土筆ん坊

残る鴨己がもとめし居場所なる

その姿いつしか鳥雲に入る

枝垂ざくら水面の陰に見ほれをり

集中治療室^{アイシユール}に観音の立つ春の闇 大阪 平野 多聞

老愁や春泥をゆくいさぎよさ

平家蚩の涙は苦し壇ノ浦

中心も終りもなくて天の川

隆隆の普賢と文殊雲の峰

校門や未来寿々八重櫻 枚方 中 貞子

まだ若き玉葱の芽の力かな

飛花落花里山に幸ありにける

微生物の進化重たきしやぼん玉

雛菊の夜には夜の顔ありて

銀河往来 高橋将夫

雲の峰が普賢・文殊菩薩の姿をひとときは大きくしている。

飛花落花里山に幸ありにける 中 貞子
飛花落花の美を里山の幸せな生活に転じたところに共鳴。
〈雛菊の夜には夜の顔ありて〉も共感を呼ぶ。

せせらぎの光とびつく雪柳 藤田美耶子
「光がとびつく」という表現が巧み。せせらぎと雪柳の煌めきが鮮やかに目に浮かぶ。

〈まがごとく青さめ白む桜かな〉と〈花筏に乗りてさ迷ふ虚空界〉の句の深さと広がりはまぎれもなく精神の風景。

花冷えのころろソファアに沈めをり 橋本 順子
身体と共に心までソファアに沈むという感性が素晴らしい。

〈石鹼玉ふるへて瑠璃の現るる〉の「ふるへて」、〈凭れたる柱あやふし桜桃忌〉の「あやふし」と〈夜の新樹雨の新樹の色となる〉の「夜の新樹雨の新樹」の着眼が見事。

藤棚や吉祥天に呼ばれける 阪倉 孝子
いかに素晴らしい藤棚であるか、想像に難くない。
〈こころ今遠出してをり山桜〉と〈胸の窓いつも咲かせるスイートピー〉もまた深さと広がりのある精神の風景。

鶯の初音を今日の宝とす 柴田 靖子
鶯の初音をこのように聞ける作者の精神の位相に共感。
〈残る鴨己がもとめし居場所なる〉と〈枝垂ざくら水面の陰に見ほれをり〉は「残る鴨」と「枝垂ざくら」の本質に迫る。

隆隆の普賢と文殊雲の峰 平野 多聞

次の世と思ひし一瞬花の屋 岡田 桃子
花を見ている春屋の一瞬を捉えたところが手柄。
〈見つめられ開花手間取る標準木〉〈初桜と呼ぶべき花に出遇ひけり〉〈軽トラに積み込まれぬ落花どち〉、どの句にもこの作者ならではの視点がある。

大木のかしら揺さぶる春嵐 阿部さちよ
嵐に揺れる大木。確かに最も揺れているのは木の天辺。今回の新型コロナでも天辺が揺れている。
新型コロナを詠んだ他の四句もよく工夫されている。

漣の始まりの何処春の湖 中島 昌子
広い湖に漣が広がっていく。その始点に着目したのが手柄。
〈帯となり正物となり花筏〉は比喩が適切。

春喘ぐ地球がすつぽり落し穴 出利葉 孝
まるで落し穴にはまったように喘いでいる地球。まさに今の地球だ。
〈籠の鳥読書の春に転じたり〉の読書の春は外出自粛要請の今なのだろう。